

漢字はやさしい

林 武

(洋画家・文化勲章受賞者 = 故人)

漢字がむづかしいなどといふのは迷信である。石井勲さんの実験によって、それが明らかになった。石井さんは、外国ではおとなと子供の表記は同じで、特に子供用の書き方といふものがないことから、日本だけが子供用にかな書きの教科書を使ってゐることに疑問を持ち、普通、漢字で書かれる言葉は、一年生の初めから漢字で提出するといふ原則を立てて教育したところ、子供は喜んで漢字をどんどん覚えることがわかったといふことである。

子供は、たとへば九といふ数字と鳥といふ字と鳩といふ字を教へると、たいていはまづ具体性のある鳩を覚え、ついで鳥・九といふ順に覚える。それは当然のことで、鳩・鶏・鶴などを教へたあとで、それらに共通の抽象的な“鳥”を教へるのが最も合理的である。同じように、梅・桜・桃などの具体性のあるものを教へてから“木”を教へるやうにするわけである。

漢字とかなで、漢字のほうがむづかしいといふ考へはおとなの偏見である。知恵のおくれてゐる子供も、かなはなかなか覚えませんが、

漢字なら覚えるといふ。漢字のほうがやさしいのである。覚えやすいのである。子供の記憶力といふものは、おとなには想像もつかないほどすぐれてゐる。だから、おとなにとってむづかしいものでも、子供は苦もなく覚えてしまふ。それで、小学校に入学する前の子供に、四、五百字の漢字を覚えさせるのはそれほどむづかしいことではない。

「覚える、覚える」とは言はなくても、できるだけ子供の目に漢字を触れさせるやうにすれば、それでけっこう覚えてしまふ。これまでは、漢字制限で、子供用の読物を見ても、かなばかりでほとんど漢字が使はれてゐない。そのやうに子供の目に漢字が触れないやうにすれば、どんな頭の良い子でも覚えるわけがない。しかも、学年別配当表といふやうな下らぬものを作って、一年生ではこれこれの漢字しか教へてはいけない、というふうに制限したのでは、覚えたくたって覚えられない。さういふばかな制限をやめて、漢字をたくさん使った教科書や読物を与へてやれば、子供は雪だるま式にどんどん漢字を覚えるだらう。

あるひは理屈はさうかも知れないが、実際にはどうかなといふ疑問を持つ人がゐるかもしれない。さういふ人のために、ちょっと紹介すると、石井さんのやりかたで国語教育を実施してゐる学校がいくつかあるが、最初に全校あげてこれに取り組んだ新潟県の亀田東小学校における一年生の一年間の漢字習得成績は次の通りである。

読みの能力調査

調査漢字の総数.....550 字

最高習得字数.....550 字

最低習得字数.....250 字

学級平均習得字数.....463 字

書きの能力調査

調査漢字の総数.....150 字

最高習得字数.....150 字

最低習得字数.....120 字

学級平均習得字数.....146 字

46 年に作られた学習指導要領では、これまでより、学習する漢字数を小学校全体で 115 字ふやしてをり、一年生では 30 字ふえてある。それでも一年生は一年間に 76 字の漢字を読み、そのうちの八割くらいが書ければよいことになっている。全員がその標準に達するとは考へられないが、かりにさうなつたとしても、亀山東小学校とは雲泥の相違である。

明治以来、漢字はむづかしいといふ迷信にまどはされ、どうしたら漢字を廃止できるかといふやうな研究ばかりしてゐて、どのやうに漢字を教へたらいいかといふ研究はほとんど顧みられなかつた。教育

方法さへうまく工夫すれば、漢字ほどすぐれた文字は他にないと思ふ。

よく考へてみると、漢字全廃なんてことは絶対にできないといふことがわかるはずである。文字といふものは目に訴へるものである。だから、今までの習慣といふものを、先祖伝来の習慣をこはしてしまつたら、過去の文化は死んだも同然になる。これまでに作られた文章・思想とか文学とか、歴史書とか、さういふいはゆる古典とまったく隔絶してしまふことになる。

それに、さういふことを別にしても、たとへば、新聞とか雑誌といふものが、ローマ字とかカナモジだけになつた場合を想像してみれば、望ましいことかどうかはだれにもわかると思ふ。いくら訓練したつて、とても漢字かなまじりの文のやうにはいかない。読むのに非常に骨が折れる。タイプライターがどうのかうのと言ふ人もあるが、そんなものために日本文化を犠牲にするわけにはいかない。かりに印刷物を作る側にとってどれほど能率がいいものであらうと、それを読む人にとって非能率なものであつてはなんにもならない。印刷物を作る人より、それを読む人のほうがはるかに多数なのだといふことを忘れてはならない。

外国の有名なチョムスキーという言語学者が、漢字かなまじり文のすぐれてゐる点に注目し始めてゐる。木内信胤さんなども、漢字かな

まじり文ほど能率的ですぐれた表記は世界にないのではないかと、早くから指摘してをり、僕もさう思っている。漢字は遠くからでも一目で見分けられる。看板にしる、表札にしる、新聞にしる、一目で意味がわかる。このすぐれた特質に日本人自身が気づいてゐない。

僕の経験を話すと、絵の具のチューブにはそれぞれ名前がついてゐる。画技といふものは無我になってすばやく仕事が運ばれるから、この絵の具を使ひたいと、瞬間的に緑なら緑の絵の具を探す時、横文字であると非常に探しにくい。緑なら緑と漢字で書いてあったら、瞬間的に取ることができる。ローマ字とかカナモジは表音文字だから、スペルを読まねばならぬ。それが、表音文字は個性がないから、濃緑と浅緑と間違へる。

アルファベ トで綴ってあって、たとへばカドミュームグリーンと書いてあるとすると、長いスペルで書いてある上に、チューブは大抵絵の具でよごれてゐるから、カドミュームイエローをうっかり出してしまって、ひどい目に会ふ。僕はカンヴァスに直接チューブで出すから、さういふ経験はたびたびある。緑なら緑と、ちゃんと漢字で一字書いてあれば、さういふことはない。

松坂忠則氏がカナモジのタイプライターを作るのはけっこうなことで、実用という面でそれなりに役に立ってゐる。ただ、そのために、日本語そのものをカナモジだけにされてはたまらない。松坂氏は商売

のことだけ考へてみればいいのである。それに、タイプライターだって、漢字のまじったものが使はれるやうになってゐるし、そのうちに、テレビから新聞が出てくるやうにたろだらう。

漢字がいくらつかってあっても、電送するのにはまったく支障がない。電報なども、これまではカナモジだけだったが、漢字のまじった電報ができるだらう。文字に合はせて機械を作るべきで、今までのやうに、機械に合ふやうに文字を改革しようといふのは本末転倒である。

一昨年(1977)の3月27日の読売新聞によると、電算機に接続して、漢字・仮名・数字などを自由に印刷できる“漢字ラインプリンタ”を富士通が開発したといふ。その印刷能力は、一分間に四万字で、IBM が万国博に出品したもので約五千字、新聞社などが使用してゐる漢字テレプリンターが約千五百字といふことだから、8 倍ないし 25 倍の性能である。

この“漢字ラインプリンタ”が実用化されれば、文書業務に大きな影響を与えることは確かである。タイプライターが使ひたくて、漢字全廃を企てた時代があったといふことが、一つの笑ひ草として語られる日もさう遠くないだらう。(かな遣い原文のまま)

(「漢字漢文」昭和 48 年 6 月号)